

Title	『鎮魂歌』 注解(連作第四部)
Author(s)	武藤, 洋二
Citation	大阪外国語大学学報. 71(1-3) p.111-p.129
Issue Date	1986-03-31
oaire:version	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/81095">https://hdl.handle.net/11094/81095</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 『鎮魂歌』 注解

(連作第四部)

武 藤 洋 二

“РЕКВИЕМ” А. АХМАТОВОЙ

МУТО Ёдзи

— Перевод, комментарии, интерпретация —

Анна Ахматова превратила свою личную трагедию в общенародное причитание о невинно осужденных. Ее сына Льва Николаевича Гумилева арестовывали в 1935, 1938, 1949 годах. Поэт увековечил горе матерей, стоявших вместе с ним у стены тюрьмы Крестов, где сыновья-жертвы распяты на кресте.

## 凡 例

### 1

アンナ・アフマートヴァの『鎮魂歌』のロシア語原文については、次の四種を比較した。

- (Ⅰ) Анна Ахматова, Реквием, “Товарищество Зарубежных Писателей”, Мюнхен, 1963
- (Ⅱ) Anna Akhmatova, Requiem, traduit du russe par Paul Valet, “LES ÉDITIONS DE MINUIT”, Paris, 1966
- (Ⅲ) Анна Ахматова, Сочинения, т. 1. , Издание второе, пересмотренное и дополненное, “Международное литературное содружество”, Мюнхен, 1967
- (Ⅳ) Anna Akhmatova, Marie Under, Requiem, “Inter-language Literary Associates”, New York, 1967

(Ⅰ) は初版である。アフマートヴァに無断でミュンヘンの「在外作家協会」によって出版された。(Ⅱ) は、ロシア語フランス語対訳版である。(Ⅲ) は、アフマートヴァ三巻選集に収録されたものである。(Ⅳ) は、ロシア語エストニア語対訳版である。

本文は、(Ⅰ) と (Ⅱ) が同じ、(Ⅲ) と (Ⅳ) が同じである。(Ⅰ) と (Ⅲ) には、ごくわずかのちがいがあある。(Ⅲ) は、アフマートヴァ自身が (Ⅰ) に訂正をほどこしたものであり、もっとも正しい版であると考えられる。本稿では、(Ⅲ) を翻訳の底本にし、(Ⅰ) との異同についてはそのつど明らかにした。

日本語訳には

(V) 江川卓訳 (『世界の文学 37 現代詩集』 集英社 1979年)

がある。この訳は、詩の内容を正しく伝えることに成功していない。大きな誤訳だけは、指摘しておいた。

英訳には次のものがある。

(VI) Amanda Haight, Anna Akhmatova. A Poetic Pilgrimage, Oxford University Press, New York and London, 1976

この本の第三章に訳がのっている。

(VII) Anna Akhmatova, Requiem and Poem without a Hero, translated by D. M. Thomas, Ohio University Press, Ohio, 1978

以下、これらの本にふれるさいには、ローマ数字のみをあげる。

## 2

『鎮魂歌』を生みだした歴史的状況、創作の過程、作者アフマートヴァについては、「『鎮魂歌』の時代」(連作第一部)(大阪外国語大学学報・文学篇第67号, 1984年)と「詩神と権力」(連作第二部)(同上 第68号, 1985年)とに書いたので、本稿(連作第四部)では、重複をさけるため、注釈は最小限にした。上記の論文でふれなかった点については、比較的くわしく説明した。

### 鎮魂歌

アンナ・アフマートヴァ

いや、異国の空の下でも

異人の翼のもとでもない、――

私はそのとき私の民衆と共にいた、

不幸にも私の民衆がいた所に私はいた。

1961年

### 序に代えて

エジヨーフ<sup>①</sup>が君臨したおそろしい時代に、私は、レニングラードで牢獄<sup>②</sup>の前の行列にならび、17ヵ月<sup>③</sup>をすごした。ある時だれかが私の「正体に気がついた」。もちろん私の名を一度もきいたことのない、そのとき私の後に立っていた蒼い口びるをした女が、私たち皆に持ち前の自失状態から我にかえて、私の耳元へ口をよせてたずねた(そこでは皆ひそひそ声ではなしていた)。

「ところであなたはこの有様が書けますか」

私は答えた。

「できます」

すると、かつて彼女の顔であった物のうえを、微笑のようなものがかすめた。

1957年4月1日

レニングラード

〔注〕

(1) ニコライ・イヴァーノヴィチ・エジョーフは、1927年までカザフスタンの党の勤務員であった。1927年スターリンの秘書ボスクリョーバイシェフの推薦で、スターリンのそばで働くようになった。1930年党中央委員会人事部長、1934年中央委員、1935年中央委員会書記になる。担当は、内務人民委員部、裁判所、検事局の監督である。1935年に「人民の敵根絶の仕事を指導するための保安特別委員会」が党政治局にもうけられ、エジョーフはその一員になった。1936年内務人民委員（内相）となり、「人民の敵」の粛清を行った。1938年11月解任され、1939年3月以後公の場から永久に姿を消した。知りすぎた人間として抹殺されたようである。

「エジョーフが君臨したおそろしい時代」とは、彼が内務人民委員であった1936年、37年、38年をさす。

(2) 十字架の形に建物が配置されているので十字獄（クレストウイ）という通称をもつ監獄で、レニングラードのヴィボルク地区にある。ネヴァ河のほとりになっており、フィンランド駅のすぐ近くである。対岸には、内務人民委員部レニングラード支部の建物が見える。この建物は、「大きな家」とあだ名がついている。

十字獄は、1893年に建てられた。

(3) アフマートヴァの息子レフが1938年3月10日逮捕されてから、シベリヤの収容所へ送られるまでの期間。

〔解〕

冒頭にかかげられた四行は、十月革命のあと亡命せず、亡命のさそいを断り、スターリン時代を苦しみぬいた詩人だけがしかかせることのできる題銘である。

くりかえされた「私の民衆」という表現は、自分と一緒に苦しんだ無数の仲間をさす。

1922年アフマートヴァは、祖国を捨てた者に「自分の歌を与えない」※と歌った。彼女は、民衆と運命を共有することのできなかった脱走者にではなく、「私の民衆」に「自分の歌」をささげた。その代表が『鎮魂歌』である。

アフマートヴァは、また、「後の世の評価によって、一時間一時間が正当化されるだろう」※※と付け加えた。

「私の民衆」は、アフマートヴァと一緒に十字獄の前で差し入れを持ってならんだ女たちに集約される。スターリンが、古人の表現を借りれば、天下を養っていた時代に、詩人の役割をはたすために、詩の存在価値を証明するために作りだされた詩群が、苦の行列にならぶ女たちにささげられた「自分の歌」である。

「人民の敵」の家族は悲しみを禁じられている。感情をぬきとられた顔は、単なる物になる。アフマートヴァが詩を約束したとき、その物のうえを微笑の芽が、かすかな亀裂となって、あらわれ

た。この一瞬の人間回復が、詩人のなかにいる詩神をはげました。

※ Anno Domini, Издание второе, дополненное, "Петрополис" и "Алконост", Петербург, 1923, стр. 14.

※※ 同上

〔比較〕

題銘の1961年という創作年度は、( I ) には記されていない。

献歌

この悲しみの前には山やまも頭<sup>こうべ</sup>をたれ、  
大河も流れをとめる、  
しかし牢獄の門はかたく、  
その向こうには「徒刑囚<sup>むらう</sup>の室」  
と死にいたるせつなさ。  
誰<sup>た</sup>がためにか爽やかな風が吹き、  
誰<sup>た</sup>がためにか入陽<sup>ひよう</sup>がっこう ——  
私たちはそれを知らない、どこに居ようが同じ身の上、  
聞こえるのはただ鍵の厭なひびき  
それに兵士の重い足音。  
早朝のミサに出るかのように早く起き、  
すさんだ都<sup>④</sup>を行く、  
死人より息をひそめてあそこでおち会う、  
いつもより太陽は低くネヴァ河に霧が深い、  
希望はあいかわらず遠くで歌っている。  
判決…涙が一度にほとばしる、  
すぐに皆から引きはなされ、  
まるで心臓から命を荒あらしく抜きとられたかのようだ、  
まるで乱暴にあお向けに倒されたかのようだ、  
しかし歩む…よろめく…一人で…  
憤怒の二年間<sup>⑤</sup>の  
かりそめの仲間たちは今どこにいるのか。  
シベリヤの雪嵐のなかに女たちはどんな幻を見るのか。  
月の輪のなかに女たちは何を想うのか。  
あの女たちに私は別れの挨拶をおくる。

1940年 3 月

〔注〕

(4) レニングラードは、スターリン時代に他のどの都市よりも多くの犠牲者をだした。

(5) 十字獄の前にならんだ十七ヵ月間のこと。

〔解〕

「献歌」は、自分が詩にすることをうけあつた十字獄の前の女たちにささげられている。彼女たちは、差し入れを許可された日に早起きして、ネヴァ河のほとりに立つ。ある女が身内の判決を聞くことになる日、いつもより太陽が低く霧も深く、レニングラード特有の灰色がひととき濃い。この不透明さは、深い絶望とかすかな希望とが交差する彼女の心の中の不透明さに似ている。

当時、トロイカと呼ばれる三人の人物によって囚人の運命がきめられた。判決は、従つて、法廷で告げられるのではない。囚人が多すぎて、裁判を形式的にひらくことすら不可能であつた。三人組が、即決した。トロイカは、囚人を機械的にシベリヤへ送る三頭だての死の馬車であつた。

一人の女が、差し入れの窓口で、兵士から判決がもうおりていると告げられる。

十字獄の行列は、面会者の列ではない。女たちは、差し入れの品を窓口へ出すだけである。

判決は、門の向うにいる囚人へ差し入れるという間接的なかわりすら奪う。判決のあと、門のかなたには、シベリヤの収容所群が姿をあらわす。「門」と「徒刑囚の室<sup>じょう</sup>」は、プーシキンの詩『シベリヤの深き坑道で』からとられている。肉親は、百年前にデカブリストが流されたその遠い世界へ送られる。希望に代つて、遠くで歌うのは死である。

判決を間接的に告げられたその女は、苦の行列の横をよろめきながら、元きた所へ去っていく。その姿を列のなかで詩人が見ている。この姿は、列にならぶ者の、明日の、一週間後の、一ヵ月後の運命である。

行列から離れた女に残された仕事は、「人民の敵」の家族として迫害に耐えながら、囚人が送られたシベリヤの幻を視ることである。

序歌

これは心の安らぎを喜こんで死者だけが  
ほほえんでいた時のことだ。  
レニングラードは牢獄のそばで  
無用の付け足しとなってゆれていた。  
これはまた苦しみで気がおかしくなりながら、  
すでに刑を宣告された者の群が歩み、  
別れの短かい歌を  
汽笛が歌った時のことだ。

死の星を頭上にいだいて  
罪のないロシヤはのたうちまわった、  
血まみれの長靴の下で  
黒いマリヤ<sup>㉔</sup>のタイヤの下で。

〔注〕

(6) 囚人護送車

〔解〕

死者は、もはや死者になる恐怖をあじわうことがないので、安らかである。この安らかさを生者が羨望した。十字獄の前に苦の行列ができたのは、そのような時代であった。

この時代には、牢獄群があたかも主人のようになり、町そのものがそれへの付録のようになった。牢獄が母屋で、レニングラードは庇<sup>ひさし</sup>になった。獄舎のそばで無用の体をたよりなくゆすっているレニングラードは、苦の行列と重なる。行列は、神経のようにひくひくしている。町は、行列は、ひくひくゆれている。

帝政ロシヤにストルイピンという宰相がいた。彼は弾圧に熱心で、絞首刑の縄に「ストルイピンのネクタイ」というあだ名がついた。スターリン時代の囚人護送列車は、なぜか、ストルイピンとあだ名された。囚人を一ぱい呑こんだ長蛇の列車が、ネクタイに、あるいは、絞首刑の縄に似ているのだろうか。

判決をうけた囚人たちは、ストルイピンにつめこまれて、東へむかう。発車の汽笛が囚人とあの女たちとの別れの歌の代わりをつとめる。

これは、罪のないロシヤが、スターリンの長靴の下で、内務人民委員部の兵士の長靴の下で、のたうちまわっていた時代のことである。黒いマリヤというあだ名のついた囚人護送車のタイヤの下で、レニングラードが、そしてロシヤが、そして全ソヴェトが声をうばわれ涙なしに泣いていた時代のことである。

〔比較〕

「ゆれていた」は、(Ⅰ)では、качался, (Ⅲ)では、болталсяである。

## 第一歌

あなた<sup>㉕</sup>は夜明けに連れ去られた、  
そのあとを私は出棺のようについていった、  
暗い部屋で子供たち<sup>㉖</sup>が泣いていた。  
神棚ではろうそくがとけて崩れた。

あなたの口びるには聖像の冷たさ。  
 ひたいには死の汗…忘れられない！ ——  
 私は狙撃兵<sup>⑨</sup>の妻のように、  
 クレムリンの塔の下で泣きわめくだろう。

1935年

〔注〕

(7) アフマートヴァの三番目の夫ニコライ・ニコラエヴィチ・プーニン (1888～1953) のこと。彼は、アフマートヴァの息子レフと共に逮捕された。彼は、教育人民委員部美術局のレニングラード支局長であった。日本で開かれる新ロシア美術展の責任者として、1927年来日した。展覧会は、東京、大阪、名古屋でおこなわれ、約三ヵ月つづいた。※

プーニンが逮捕された一因は、この日本滞在にあると思われる。当時、レニングラードの知識人のなかでは、在日経験のある日本学者コーンラト、ネーフスキイ等が逮捕されている。コーンラトは、収容所だけですんだが、大阪外国語学校教授として日本の生活が長かったネーフスキイは、銃殺された。1983年の夏に、かつてこの二人の同僚であった某女史に確かめたところ、在日経験が犯罪行為とみなされた時代であったという説明をうけた。

※ И. П. Кожевникова, Варвара Бубнова — — русский художник в Японии, "Наука", Москва, 1984, стр. 126 — 131.

(8) プーニンと先妻との間の子供。共同住宅になっていた憤水邸にアフマートヴァもプーニンの前妻もいっしょに住んでいた。

(9) ピョートル大帝によって処刑されたモスクワ公国の狙撃兵たち。

〔解〕

第一歌は、1935年の第一回目の逮捕の光景である。出棺は、単なるひゆでなく予言のようにひびく。プーニンは、逮捕と釈放をくりかえし、1953年に獄死した。

場所は、アフマートヴァが住んでいた憤水邸である。この巨大な古い館は、十八世紀の半ばに建てられた、シュレメーチェフ伯爵家の邸宅である。前を憤水川<sup>フォンタンカ</sup>が流れ、アニーチコフ橋の近くである。この屋敷に幾組かの家族が住んでいた。

流れ崩れたろうそくは、出棺とともに、夫の行末を暗示している。生身のあたたかさを失った夫のくちびるに与えられた聖像という表現は、やがてあらわれる十字架上の囚人の像とかかわり合う。出棺もとけたろうそくも聖像も死を暗示する。これを、ひたいの死の汗が集約する。死の汗は、生身の体に映った死の影である。

第一歌は、死の門出を歌う。

アフマートヴァは、妻として、これを忘れられない。詩人として、これを忘れない。『鎮魂歌』は、苦しみの記憶の芸術化である。

クレムリンの塔の下で泣くとは、アフマートヴァがスターリンへの直訴の手紙をクレムリンのクターフィヤ塔へとどけに行ったことを意味しているのだろう。



〔比較〕

六行目は、(I) では Смертный пот на челе не забыть.

(III) では Смертный пот на челе… Не забыть! — — となっている。

第二歌

静かなドンが静かに流れ、  
黄色い月が家に入る。

帽子をあみだにかぶって入り、  
黄色い月は影を見る。

この女は病気です、  
この女は一人です、

夫<sup>⑩</sup>は墓に、息子は牢に、  
わたしのために祈って下さい。

〔注〕

(10) プーニンのことではなく、最初の夫ニコライ・ステパノヴィチ・グミリョーフ (1886～1921) のこと。詩人。反革命活動により銃殺された。レフの父親。

〔解〕

夫も息子もうばわれ、女主人公は、人間のもぬけの殻となって、影となって、憤水邸の一室に坐っている。憤水川<sup>フォンタンカ</sup>は、まるでドン河のように静かに流れている。黄色い月の光が、生身の体を失い影のようにはかなくなっている女の影法師をつくる。影は、月に祈りを乞う。第二歌は、影となっている女と月がつくりだす影法師との二つの影について歌っている。

第三歌

ちがう、私ではない、別の誰れかが苦しんでいる。  
私ならこんなに苦しめない、あの出来事を、  
黒い羅紗で覆わせよう、  
灯を持ち去っておくれ…

夜だ。

1940年<sup>⑪</sup>

〔注〕

(11) この創作年度は、(I)にも(III)にも記されていない。『詩人文庫』版※にのみ記入されている。

※ Анна Ахматова, Стихотворения и поэмы, Библиотека поэта, "Советский писатель", Ленинград, 1977, стр. 192

〔解〕

自分の苦しみは、自分の限界をこえている。自分がこんなに苦しむことができるとは思えない。別の人が苦しんでいるのではないか、と思うほどだ。

逮捕という出来事を闇にほおむってほしい。灯を持ち去ってほしい。夜の闇のなかにあの出来事が隠れてしまう方がよい。なにも自分に分らないようにしてほしい。

『鎮魂歌』では、忘れてはならないという詩人の心と、いっそのこと記憶をすててしまいたいという母親の心とが交差する。

第四歌

見せてやりたいものだ、人をからかってばかりいた少女、  
皆の人気者で  
ツアールスコエ・セロー<sup>⑫</sup>の陽気な不良少女だったお前に、  
その後の人生に起ることを――  
300番目<sup>⑬</sup>の女として、差入れを持って、  
十字獄のかたわらに立ち<sup>⑭</sup>  
自分の熱い涙で  
正月の水に穴をあける様を。  
あそこには牢獄のポブラがゆれている、  
物音一つしない――そこでどれだけ  
罪のない命がはてることか……

〔注〕

(12) 現在のプーシキン市。レニングラードの郊外にある。アフマートヴァは、この森の町で1才から16才まですごした。

(13) 監獄の差入れの行列にならぶためには、ふつう、前夜に自分の名を記入してもらい、順番の番号を知らせてもらう。

(14) ロシヤ語では、十字架の下でという意味と重なる。

〔解〕

プーシキンゆかりの、森と詩の町、皇帝の離宮の町ツアールスコエ・セローで、苦勞しらずの少女時代をおくっていた何十年も前の私に、十字獄の前で300番目の差入れ人としてならぶはめになるのを見せてやったら、どんなに驚くだろうか。十字架の下にたたずむマリヤのように、我が子の入っている十字獄のそばに立ちつくす姿を見せてやったら、あの少女はどうするだろうか。あの時の自分と今の自分との隔絶についての歌である。

立ちつくす足元に北露の大地が凍っている。

正月のネバア河は、コンクリートのような氷でかたまる。その河岸通りに立つ詩人は、不覺にも涙をおとした。その一滴は、厚い氷に穴をあけてもいいはずだ。心のたけの一しずくだから。

行列の横の赤レンガの壁の向うでどれだけの囚人が人生をおえることか。その囚人の一人が我が息子レフである。母親は、ただひたすら立ちつくすだけである。

比較

(Ⅴ) では、「300番目の女として」が、「三百日を一日のように」となっている。これは、内容的にも文法的にも不可能な奇怪な訳である。

第五歌

十七ヵ月のあいだ叫び、  
お前を家へと呼ぶ。  
官吏の足元に私は身を投げた、  
お前は息子で私の恐怖。  
なにもかも永遠にこんがらがり、  
私には判断できない、  
今となつては誰れが獣で誰れが人間か、  
処刑を長く待たなければならないのか。  
ただ在るのは埃りをかぶった花と、  
手提香炉のひびきと  
どこへも続かない足あと。  
大きな星が  
私の目をまともにのぞきこみ  
まもなく死ぬと脅かす。

1939年

〔解〕

最愛の人は、恐怖である。なぜなら、その人を失ったと思うだけで恐怖にふるえるからである。「私の恐怖」とは、最愛の人にたいする表現である。息子は「恐怖」である。だから、母親は苦しむ。

詩人は教会にいる。しかし、救われるどころか、不吉な星が、あってはならないことを告げているようだ。

この恐ろしい時代に、人びとは獣にもなる。密告する者、苦しんでいる人間をさらに苦しめる者。誰れが獣か、まともな人間か、分りにくい時代だ。この時代に母親である詩人は「恐怖」をかかえて生きるはめになった。

〔比較〕

(V) では、「私の恐怖」は、「わが不幸」となっている。1939年という創作年度は、(I) には記されていない。

## 第六歌

軽やかな数週間が飛び去っていく、  
 何が起っていたのか私には分るまい。  
 息子よ、獄舎のお前を  
 白夜はどのようにながめていたのか、  
 鷹の熱いまなこで、  
 今年もまたどのようにながめているのか、  
 お前の高い十字架について  
 そして死についてどのように語っているのか。

1939年

〔解〕

息子レフは1938年と1939年の二回の白夜を獄中でむかえた。獄中の息子に白夜のあいだ何が起っていたか、母親である私には分らないままになるだろう。今年1939年の白夜が、自分の心の重さとは逆に軽やかにすぎ去っていく。白夜の、夜でも昼でもないとらえどころのない時間と空間に、息子の運命が隠されているようだ。

十字獄の囚人であるレフ、この囚人の背おっている十字架と十字架上の死についての知らせが、白夜のなかにあるのだろうか。

第四歌で、十字獄のそばに立つ母親としての自分が、十字架の下に立ちすくむ聖母マリヤに重ね

られたように、この第六歌では、十字獄で十字架を背おうソヴエトのキリストとしての囚人の姿が見えてくる。十字架をはさんで母と子がかかわりあう。十字獄をはさんで内と外に母と子がいる。

〔比較〕

(V) では、「高い十字架」が、「十字架のけだかさ」となっている。

第七歌

判 決

石の言葉が落ちた  
私のまだ生きている胸に。  
何んでもない！覚悟はしていた、  
何んとかきりぬけよう。

私には今日たくさんの仕事がある。  
記憶をことごとく殺さなければならない、  
心を石にしなければならない、  
生きることを学びなおさなければならない、――

さもなければ…夏の熱いさざめき、  
私の窓の向うに祭があるかのようだ。  
私は前から予感していた、この  
明るい日と廃屋とを。

1939年夏<sup>⑮</sup>

〔注〕

(15) 『詩人文庫』では、1939年6月22日憤水邸、となっている（192頁）。  
この日は、アフマートヴァの50才の誕生日の前日である。

〔解〕

敵が石なら、運命が石なら、自分も石にならなければ太刀打できない。息子への判決が石となって母親の上に落ちたとき、母親は、息子についての記憶をすてて、石の人になりたい。人生をやりかえる必要がある。だから、判決のあとは忙しい。これは、母親の仕事である。詩人の仕事ではない。詩人は、あらゆる記憶をたもたなければならない。母親は詩人を追いはらいたい。

息子のいない家は、廃屋と同じである。しかし、窓の外は祝祭のように明るい。廃屋と祭のきわだったちがいが、苦しみを強調する。

献歌に登場した一人の女——判決をきかされて、よろめきながら去って行った女——が、我が家にたどりついたときから、第七歌が始まるのだろう。

## 第八歌

死へ

どうせ来るなら——なぜ今でないのか。  
私はお前を待つ——とても苦しいから。  
私は明りを消し戸を開けた  
あのようにさりげないそして変なお前のために。  
私を殺すためにはお前はどんな姿に身をやつしてもよい、  
毒ガス弾となって突入せよ  
あるいは経験豊かな強盗のように鈍器をもってしのびこめ、  
あるいはチフス菌を感染させよ。  
あるいはお前がつくったおとぎ話  
吐き気のするほど皆におなじみのおとぎ話を使え、——  
私が空色の帽子<sup>(16)</sup>のてっぺんと  
恐怖で蒼ざめた管理人を見るように。  
今ではどうでもいい。エニセイ河<sup>(17)</sup>が逆まき、  
北極星が輝く。  
愛しいまなこの青いかがやきが  
最後の恐怖をとざしてくれる。

1939年8月19日

憤水邸

〔注〕

(16) 内務人民委員部の制帽。

(17) レフがいる所。

〔解〕

第七歌の石化の試みは、成功しない。女主人公は、廃屋で死を招く。死はいつかは必ず来るの

だから、今来てほしい。彼女は、死がいつきてもいいように戸を開けておく。

どんな方法で殺してくれてもいい。空色の帽子をかぶった内務人民委員部の兵士たちが、とつぜん逮捕にあらわれ、住宅の管理人が恐怖で蒼白になって立会っている光景が展開される、あの吐き気のするほどおなじみの人間狩りの「おとぎ話」を使ってくれてもよい。死神が書いた「おとぎ話」の中にひきずりこまれて死のうが、他の方法で死なせてもらおうが、今ではどうでもいい。

レフのいる所が幻にみえる。エニセイ河が荒れ、その上に北極星が光り、息子の青いひとみがかがやく。

そのまなこが、死の恐怖をかくしてくれる。

#### 〔比較〕

(Ⅴ) では、二行目が、「おまえを待つ——そのことがたまらなくつらいのに」となっている。息子をとられてつらいから、死を待つ、という原意とはずれている。最後の二行は、「愛してやまないあのひとみの青いひかりが、『死の前の最後の恐怖におおわれていくのだもの』と訳されている。この訳には賛成できない。幻にみる息子のひとみのかがやきが、死を待っている自分の恐怖をおおい隠してくれるのである。だから死は恐わくくないのである。息子に死がせまっているのではない。(Ⅱ) と(Ⅵ) も、この解釈にもとづく訳だと思われる。(Ⅶ) は、(Ⅴ) と似ている。一般的に、(Ⅶ) は、原文からかけはなれている。

### 第九歌

すでに狂気がその翼で  
心の半分をとぎし、  
火の酒を飲ませ  
暗い谷間へさそう。

私には分った、狂気に  
勝利をゆずらなければならないと、  
まるで他人のうわごとのように  
自分のうわごとを聞いたとき。

狂気は許さない  
何を持って行くことも  
(どんなにたのもうが  
うるさくせがもうが)。

息子の恐ろしい目 ——  
石化した苦しみ —— も、  
雷雨<sup>⑮</sup>のやって来た日も、  
牢獄の面会の時も、

手の愛しい涼しさも、  
ぼだい樹のおののく影も、  
遠くの軽やかなひびき ——  
最後のなぐさめの言葉 —— も。

1940年5月4日

憤水邸

〔注〕

(18) 息子の逮捕

〔解〕

心の半分が狂気に占められた。もう半分も狂気にゆだねたほうがいい。そんな状況になった。心の全部が狂気の間になったとき、そこは「暗い谷間」になる。それは、記憶のない世界である。そこには、詩神はやどらない。そこは、詩人の住めない所である。そこでは鎮魂の歌もきこえない。

苦しみが石化して息子の目に刻みこまれている。それが母親の目に焼きついている。「暗い谷間」へ行けば、苦しみが石になるまでのすべての記憶から解放される。その時、母親は楽になるだろう。しかし、息子についてのすべての記憶を失うのも、恐怖である。狂気は、いかなる思い出も許さない。

〔比較〕

(V) では、七行目が、「はや声がわりさえたような」と意味不明の訳になっている。ここは、自分自身のうわごとを、だれか別の人が云っているのだと思って、聞いている、という発狂寸前の状態をあらわしている。

第十歌

礎

「母よ、私のことをなげくな、



私は棺のなか」

I

天使の合唱が偉大な時<sup>⑱</sup>を祝福した、  
天は炎のなかに熔けた。  
父に云った「なぜ私をみすてたまう」  
母には「私をなげくな…」

II

マグダリーナ<sup>⑳</sup>はのたうち泣いた、  
愛弟子<sup>㉑</sup>は石のようになった、  
母が黙って立っている方へは、  
だれも目をやる勇気がなかった。

1940～1943年

〔注〕

- (19) キリストの昇天。  
(20) イエスの最後を見とどけ、そのあと復活のキリストに会った、マグダラ出身の女。  
(21) キリストの愛弟子。

〔解〕

第十歌は、イエスが十字架のうえで昇天した時の光景を福音書どおりに再現したものである。イエスは、レフであり同時にレフに代表される無実の囚人たちである。十字架の下に立ちつくすマリヤは、母親アフマートヴァであり同時に囚人の母親たちの代表である。それは、また、苦の行列の女たちの代表である。

終歌

I

私は知った、どのように顔がやつれていくか、  
どのようにまぶたの下から恐怖がのぞいているか、  
どのように楔形文字の硬い頁を  
苦しみが頬にうかびあがらせるか、  
どのように灰色や黒色の毛のたばが  
突然銀色になり、  
従順な口びるに微笑がなえ、  
乾いた笑いのなかにおどろきがふるえるかを。

私は自分のためにだけ祈るのではない、  
あそこに私と一緒に  
ひどい寒さのなかを七月の暑さのなかを  
赤い盲いた壁の下で立ちつくした皆のために私は祈る。

## II

またもや追善の時が近づいた。  
私はあなたたちを見、聞き、感じる。

かろうじて窓口<sup>②</sup>まで連れて行ってもらった女を、  
生みの大地をふめない女を、

美しい頭をふって  
「ここへは、我が家のように、やってきます」と云った女を。

皆の名をあげたいのに、  
名簿はうばわれ、知りようがない。

彼女たちから聞き盗ったとぼしい言葉から  
彼女たちのために広い覆いを織った。

彼女たちについていつでもどこでも思い出す、  
また災いにあっても彼女たちのことは忘れない、

もしも一億の民が呼ぶ  
私の疲れきった口がとざされるなら、

彼女たちに私のことを追悼させよ  
私の追善の日の前日に。

もしもいつかこの国で  
私に記念碑をたてようとおもうなら、

その行事に同意する

次の場所にたてないという条件つきで――

私が生まれた海<sup>22</sup>のそばでもなく、  
海とは最後のつながりも消えた、

皇帝の園の秘密の切り株<sup>23</sup>のそばでもなく、  
そこではうかばれない霊が私をさがしている、

私が300時間立ちつくしたここ  
私に門が開けてもらえなかったここに建ててほしい、

なぜならありがたい死のときでも恐れるのは  
黒いマリヤのとどろきを忘れることだから、

厭な扉がぱたんと閉まり  
手負の獣のように老婆が泣きわめいた様を忘れることだから。

不動の青銅のまぶたから  
とけかかった雪が涙となってほとばしれ、

牢の鳩よ遠くで鳴け、  
船よネヴァ河を静かに進め。

1940年3月

〔注〕

(22) 十字獄の差入れのための窓口。監獄の前の行列は、この窓口へ向ってのびている。

(23) 黒海。

(24) 最初の夫グミリョーフの銃殺現場だと考えられる。『柳』という詩にも、この切株がでてくる。くわしくは拙論『詩神と権力』を参照して下さい。

〔解〕

詩人は、行列の女たちの苦しみと恐怖のさまざまな形とあらわれを、見てきた。

赤レンガの窓のない壁にそって一緒にならんだ女たちのために、詩人は、祈る。

彼女たちのなかに、病氣か心労か、自分一人で差入れの窓口までたどりつけず、連れていってもらった者もいる。死んで、もはや大地をふめない者もいる。肉親がいれられているので十字獄へ来るのが、我が家へ帰ってくるようだ、と悲しみに頭をふりながら云った女もいた。

これらの無口な女たちがわずかにもらす言葉を、詩人は、そっと聞き盗って、その言葉を糸にして布を織りあげた。その布とは、棺の覆いであった。第十歌の礎のあとで必要になる布である。苦しみの言葉で織られたこの覆いが『鎮魂歌』である。

詩人は、一億の無言の民の口であった。詩人は、彼らに代って詩で発言した。詩人の口がとざされるとき、詩人が殺されるとき、詩に詠まれた人びとが詩人を追掉せよ。

もし死後に記念碑をたてるなら、詩人が生れた黒海のそばは適当でない。そこは、あとの人生とは、何んの関係もなくなった。

ツアールスコエ・セローの森のなかに、一つの切株が残っている。最初の夫で、詩人で、レフの父親であるグミリョーフが殺された場所である。そこには、成仏できないでいる霊が、妻であった詩人を求めてさまよっている。しかし、そこも、記念碑の場所ではない。

詩人への碑とは、苦しみの記念碑である。だから、十字獄の前、苦の行列の場にたててほしい。

青銅になった詩人のまなこに雪がつもるだろう。その雪がとけて、青銅の頬をつたうとき、それを苦の行列の涙とおもえ。

アフマートヴァに記念碑はたてられなかったが、彼女は、『鎮魂歌』という記念碑を残した。それは、青銅の碑よりも長生きするだろう。

#### 〔比較〕

(Ⅰ)では、Ⅱの三行目に до конца があるが、(Ⅲ)では до окна に変っている。(Ⅴ)では、三行目が、「苦痛にひしがれて、人間とは思えなくなったその女を」となっている。原文とはかけはなれた不可解な訳である。

(連作第四部おわり)

1985年